

自個弱小保護の口實

理想實行力の養成

は一方に於ては、斷じて世界流行の國際的罪惡より脱離する事、他方に於ては、積極的に大なる理想を、我が日本帝國の目標として、それに向つて勇往邁進する事、而して更に此の現實界と理想界との間に、其の通路を開き、世界の人類をして、一寸たりとも、一尺たりとも、此の慘めなる現實界より、理想界に接近せしむる事である。

吾人は日本帝國が、強大國よりも、寧ろ正善國たるを欲し、威力國よりも、寧ろ君子國たるを欲す。されど言葉の上の正善や、文字の上の君子では、世界は却て自個の弱小を保護する爲めの口實と見て、それ以上に我を尊敬する者はあらず。乞食の慈善論も、議論としては聞く可きも、乞食たる身分に顧みては、自己の口を糊する方便と見らるゝも詮方なし。されば我が高尚遠大なる理想を、國際的に實行せんには、須らく先づ之を國際間に實行せしむるだけの力を養成はねばならぬ。若し此力を養成ふことを怠めず、徒らに急言竭論、世界に向つて、天地の公道を説くも、世界は更に其の反響を來たさぬであらう。

惡・愚・奸・迂皆な非

強き善國たるを期す

他人を欺くは惡、他人に欺かるゝは愚、他人を油斷せしむるは奸、他より油斷せしめらるゝは迂、吾人は決して他の者が、暴力を恃んで、傍若無人の振舞を傲すを見て、自から斯く行はんとする者ではない。されど自から拘兒たらざるが爲めに、我が懷中物を拘られねばならぬ理由はない。吾人は高尚遠大なる理想を目前に掲ぐるが爲めに、決して現在の醜惡なる情態に、盲目ではならぬ。縱令他を拘らざるも、他から拘られぬだけの用心は、肝要である。縱令他を侵さざるも、他から侵されぬだけの覺悟は、必須である。吾人は弱き善人にも與しない、強き惡人にも與しない。人としては強き善人であり、國としては強き善國たるを期せねばならぬ。強則ち善ではない。されど強ならざれば善を行ふ能はず。行ふ能はざれば、善なきと擇ぶ



日本國民の理想と明治天皇の大御心

所なし。

此の如く詮じ來れば、日本國民の理想は、(第一)國民的に一致し、(第二)國民的に協力し、(第三)國民的に活動し、而して先づ自國を正しく且つ強くし、強く且つ正しくし、而して延いて之を世界に及ぼすにありとせねばならぬ。而して此の理想や、實に歷朝の宏謨に存し、別けて我が明治天皇の維新の詔書、及び五箇條御誓文に存し、更に切言すれば、明治天皇の御一代の盛徳大業と、其の巍々蕩々たる御人格に存する。皇室中心主義の意義、此に至りて、完美なりと云ふ可し。若し億兆皆な明治天皇の大御心を心とせば、帝國の理想到達に於て、何かあらむ。

### 第二十七 兵役の權利及義務

兵役は國民要務の一

日本國民は、兵役の義務に服せねばならぬ。此れは義務と云ふよりも、寧ろ權利と云ふを適當とする程、それ程大切なる、國民の要務の一である。

武門武士の全廢と全國皆兵主義

從來我國には、武門武士なるものありて、兵權を一種の階級に壟斷してゐた。數百年に互れる、多くの弊害は、此れから生じた。此に於て維新の大改革は、主として此の武門武士なるものを全廢して、全國皆兵主義に據り、兵役を全國民に負擔せしむることゝした。是れ實に國民間に於ける、差別撤廢の一大作用と云はねばならぬ。

天皇の御旗の下に集合

凡そ國民が、天皇の御旗の下に集合して、一國を守護するは、其の國民の當然の義務と云ふばかりでなく、又た其の國民の誇りである。凡そ一國に警察力なき時は、其の秩序を維持する能はず。兵力は、



兵力は對世界の警察力

一國が對世界の上に於ける、警察力である。社會に火附、盜賊、殺人、其の他凡有る惡事を、未萌に制し、既發に治め、人をして其の生命、財産を安全ならしむるもの、一に國內に於ける警察力に頼る。其上更に兵力あり、國內に於ては、警察力にて及び難き大事件に際して、之を取締り、國外に向つては、平時に於ては、以て自國の體面と利益とを擁護し、一旦緩急に際しては、國運を賭して戰ふもの、一に此力に頼らねばならぬ。

國と兵力

要するに、今日に於ては、兵力なき國は、國たる機能なきものと云ふ可きものである。如何なる機能あるも、若し兵力を缺かば、其の機能を完全に働かしむる能はず。乃ち事實に於ては、有も猶ほ無の如きものである。

數其の物が勝敗の一大要素

特に世界大戰の結果は、數其の物が、勝敗の一大要素たることを、痛切に教訓した。而して其の數の要求に應ぜんとするには、全國皆

兵力と制暴平亂

兵の實を、徹底的に行ふの外はあるまい。兵は毒にもなる、藥にもなる。暴を恣にし、亂を放にするも兵である。然も暴を制し、亂を平ぐる、亦た兵である。兵は凶器なりと云ふも、他が此の凶器を以て、我に非理を加ふるに際し、我が自から直くする所以は、此の兵に頼りて自から立つより、他の手段は無い。此の意味に於て、兵は正器であり、吉器である。

維新當初諸外國の無禮非義

我が維新當初、諸外國が、如何なる無禮、非義を、我が帝國に加へたるかは、現代の人々は、恐らくは之を知らず。或は少しく知りたるも、之を忘却したのであらう。此の獨立帝國の日本の玄關前、横濱に於てさへも、所謂赤隊なるものがありて、外國の兵士が、自から其の居留地を護り居たではない乎。其の他彼等外國人が、封建時代の暴君も啻だならざる態度もて、我に臨みたることは、今更ら之を想起するだに、頭痛の種である。然も今日に於て、之を忘るゝに至らしめ



大なる武勳の結果

たのは、何の爲めぞ。日本が世界の面前に於て、大なる武勳を奏したる事を以て、其の唯一と云はざる迄も、其重なる一の理由と爲さねばなるまい。

元氣の象徴

一國の元氣は、國民が勇奮して、兵役に従ふによりて象徴せられ、又た此によりて長養せらる。

古き祖先の勤王赤心

海行かば、水つく屍、山行かば、草むす屍、大王の邊にこそ死なめ、長閑には死なじ。

維新先輩の熱誠吐露

是れ我が古き祖先の、勤王の赤心を謠うたるもの。

大君の御旗の下に死にてこそ  
人と生れし甲斐もありけれ

是れ維新の先輩が、忠君の熱誠を吐き出したるもの。若し今日に於て、我が國民の一人にても、兵役を忌避し、若くは兵役を無用視するが如き者あらば、何れも我が大和民族の顔汚しと云はねばならぬ。

國體を毀る鈍賊

ぬ。自分等は兵役を避けて、他を雇使し、所謂る雇兵もて國を守らんとするが如きに至りては、是れ我が國性を傷け、我が國體を毀る鈍賊と云はねばならぬ。

一國は一大兵營陛下は其の大元帥

天皇陛下が、一國の元首にして、又た國民的一大家族の家長にて在すが如く、軍事的に見れば、一國亦た一大兵營にして、陛下は實に其の大元帥である。

兵營は、一種の國民的訓練の學校。自發の志趣、協戮の襟懷、友愛の至情、

自恃の氣象、獻身の精神、皆な此中より養成し來る可きもの。



國民の權利に  
して義務

### 第二十八 參政權の行使

參政權は、一方から見れば、國民の權利である如く、他方から見れば、亦た國民の義務である。吾人は國民として、一國の政務に參與するを以て、立憲國民の大なる權利と認むると與に、之を遂行するを以て、大なる義務と心得ねばならぬ。されば自から代議士たらんものは勿論、其の選舉者に於ても、此の大切なる立憲國民たる權利と義務とを、宜しく大切に護持し、慎重に行使し、踐履せねばならぬ。

一國の進運に従ひ、選舉權の擴張は、必然の數であり、且つ必然の理である。我が日本帝國の如きも、明治二十三年帝國議會開設以來の跡に就て考察すれば、其の擴張の程度は、或は遅々たる如きも、確かに擴張せられ來つた。今後如何なる程度迄擴張せらる可き乎は、今茲に斷言し難しと雖も、日本帝國の、或る年齢に達したる男女は、

議會開設以來  
選舉權の擴張

概して選舉權の所有者となる可きは、斷じて疑ひなし。

立憲政治的教  
養の必要幾倍  
す

されば此れと同時に、我が國民に、立憲政治的の教養を施すの必要は、更に従前に比して、幾倍し來ると云はねばならぬ。其の教養の第一義は、此の選舉權は、一人一個の我儘勝手に、私用す可きものでなく、日本國民として、日本帝國の大政に對して持つ所の、發言の權利でもあり、義務でもある。即ち個人的私有物でなく、國民的公有物であることを、會得せねばならぬ。

投票賣買は憲  
政の罪人

されば投票賣買の如きは、大にしては國を賣り、小にしては我を賣るものである。國を賣るとは、國利民福を賣るもの。我を賣るとは、我が良心と體面とを賣るもの。固より斯る徒輩に、立憲國民たるの資格なきは勿論、憲政の罪人、帝國の逆賊と云ふも、決して過言ではあるまい。

人間は冷靜なる理性にのみ支配せられず、時としては熱沸せる



貴重なる一票  
と一國の國利  
民福

感情に左右せらる。されば黨派感情の、互ひに亢進し來るや、往々脱線的の言動あるは、政界に於ける尋常茶飯の事だ。吾人は決して之を苛酷に咎めんとするものではない。されど我が貴重なる一票を、一國の國利民福以外、我が一個の私利私慾の爲めに、賣買するが如きは、縱令其事が甚だ輕少なるが如きも、其の罪惡は、實に重大と云はねばならぬ。此の如く投票賣買もて、代議士を選出したる議會は、假令其の看板は堂々たるも、亦た是れ一種の糶賣市場に外ならず。其本亂れて、其末治まるものはない。腐敗手段を以て出て來りたる議會が、腐敗議會たる事は、犬の腹より出てたる子は、飽迄も犬であり、猫の腹より出てたる兒は、飽迄も猫であるの類だ。

一種の糶賣市場

憲政的自覺の  
急務

憲政の基礎は、法制に存す。法制の第一位は、憲法である。されど若し國民が憲政的の教養なきに於ては、其の憲法も亦た、乾燥無味なる法文に止まり、自から徒法たるに過ぎざる可し。如何に法律上に

て、投票賣買の取締をしたとて、其の効能は、皆無ではないが、決して之を全く杜絶し得可きものでない。それよりも、總ての參政權を有する國民をして、各人各個に取締らしむるを以て、尤も有効に、且つ完全の方法と爲す。而してそれは彼等をして、憲政的に自覺せしむるより急なるはない。

憲政的國民教養の第一歩は、國民各個をして、自重せしむるより先なるはなし。一人の生命は、地球よりも重しと云ふ語がある。國民各個の人格は、此の如く貴重のものたるを自覺するを要す。



憲政的教化の  
二大要綱

### 第二十九 自治心と公共心

憲政的教化に於て、二大要綱は、自治心と公共心の養成である。自治心とは、我自から我を恃み、我自から我事を做すと云ふ心を意味し、公共心とは、我は公共團體の一員である、故に其の一員として、公共團體全般の爲めを圖らねばならぬと云ふ心である。而して此の二者は、自から線針相通じてゐる。自治心を擴ぐれば公共心となり、公共心を卷けば自治心となる。

自主の心と自  
治の人

自主の心ありて、始めて自治の人たるを得、自治の人にして、始めて立憲國民の根本的資格が出て来る。若し我に自治心あらん乎。如何に煽動政治家出て来るも、如何に投票仲買人が高價に糶り上ぐるも、決して我心を動かす如きことなけむ。

自治心の要

自治心の要は、我が分内の事は、他の強制や、勸誘を俟たず、又た他

憲政的教化の  
大乘

の援助や、示導を仰がず、我自から我事を行ふにあり。一國の弱きは、其の要素たる國民の弱きが爲め。而して其の國民の弱きは、彼等が自治心なきが爲め。言ひ換ふれば、窮すれば天を怨み、人を咎め、苦めば自暴自棄し、困すれば他人に向つて救護を叫ぶ。斯る肺腑斐なき國民の集合では、幾億ありとも、決して頼みとす可きではない。

但だ自から我事を做して、他人の厄介にならぬは、立憲政治下の國民として、纔に小乘的教養に止まる。此れを一步踏み出し、進んで我自から公共團體の一員たるを自覺し、その自覺心によりて、我自から公共團體の爲めに貢献し、奉仕し、時としては我自からの利益さへも、之を抛つて顧みざるに至る。此の如くして始めて、憲政的教化の大乘に達し得たものと云はねばならぬ。自發的に、我が利益を抛ち、公に徇するに至りて、茲に始めて公共心の完全なる働きを見る。



人間到處公共心の試煉所

凡そ公共心の發動するは、決して一國の大政の上のみではない。一村に於ても、一町に於ても、若くは向ふ三軒兩隣に於て、或は汽車の中、電車の中、乗合自動車の中、苟も二人以上の群集する所、必ず公共心の試煉所たらざるはなし。

我儘心はあり自治心はなし

群集の中にありて、その群集を認めず、宛も自分一個、我家の一室中にあるかの如く心得、傍若無人の振舞を爲す者は、如何にも淺ましき野蠻人と云はねばならぬ。彼等には我儘はあるが、自治心はない。自治心の本諦は、我身を時と場所とに應じて、其宜しきを爲すにあり。群集の中に處しては、其の一人らしく行動するが、自治心の發作である。自から治むるが爲めに、他に迷惑をかけても顧みず、自から治むるが爲めに、他に損害を與へても頓著せずと云ふが如きは、是れ自治心でなくして、自儘心である。自治でなくして、他害である。我が敢爲、勇往なる日本國民は、不幸にして、此の自治心の教養が

自治心公共心願る缺乏

缺乏してゐる。而して其の必然の結果として、公共心に至りては、頗る缺乏してゐる。其の所謂上流社會より一般に通じて、吾人はあらゆる群集の中に、多數の各個人を見出すも、未だ所謂一團の群集なるものを見出さぬ。彼等は十人でも、百人でも、只だ個々別々の十であり、百である。其の極、互に睨み合となり、妨害の原動及び反動となる。宛も身を群集の中に投ずるは、宛も人をして敵中に入るの感あらしむ。若夫れ所謂公共心ある者は、互ひに相集れば、乍ち一和し、乍ち一和すれば、乍ち自他の利害を、其の團體の利害中に没投して、互ひに申し合する迄もなく、相競うて其の團體の爲めに、害を去り、利を致すの努力を事とす。教養此に至りて、始めて立憲國民の資格具備するに庶幾し。

立憲國民の資格を具備せよ



愛國心・自愛心・愛家心

妄想者と妄言者

愛國心と自然の順序

### 第三十 愛國心と皇室中心主義

愛國心とは、自國を愛する心を云ふ。猶ほ一身を愛する心を、自愛心と云ひ、一家を愛する心を、愛家心と云ふが如し。

今日に於て、所謂る新人と稱する者の中には、愛國心を呪ふ者が少くない。而して愛國心を以て、世界心の敵と爲す者がある。斯く思ふ者は、實は愛國心の何者たるを解せざる妄想者であり、斯く云ふ者は、妄言者である。

愛國心は決して世界心の敵ではない。誰か愛國心の敵は、愛身心である。と云ふ。誰か愛國心の敵は、愛家心であると云ふ。而して誰か愛世界心の敵は、愛國心であると云ふ。身を愛するが故に、家を愛する。家を愛するが故に、國を愛する。國を愛するが故に、世界を愛する。此れが自然の順序であり、此れが當然の經過である。則ち階段を踏

只だ世界の厄介者

愛國は前提愛世界は結論

愛身愛國更に相反せず

んで、上層に登るが如し。如何にして世界を愛し、何を以て世界を愛し、何によりて世界を愛する。如何に心は世界を愛するにありても、眇然たる世界の浮浪人としては、如何なる權威かある。彼等は只だ世界の厄介者たるも、決して愛世界者たる實効を發揮することは能はぬ。

今日に於て、國は人類の法制的、且つ倫理的集團として、其の極致である。吾人は國を透して、世界に貢献し、國によりて世界に謁し、國を以て世界の爲めに働く。故に之を徹底的に考究すれば、愛國と愛世界とは、二致なし。愛國は前提であり、愛世界は結論である。乃ち愛民族と愛人類の關係も、亦た此通りである。己を愛するが故に、國を愛す。然かも國を愛するの極、時として己を捨つるは何故ぞ。己が愛する國なればこそ、己を捨つるではない。



乎。故に詮じ來れば、愛國の餘、己を犠牲とするは、決して己を忘れたるにあらざ、己を惡みたるにあらざ、己に不親切の爲めにあらざ、寧ろ己の愛する所に殉したる也。故に結局は、己に殉したるも同様也。此に至りて愛身愛國、決して相反せずと知る可し。

善きも惡しきも我國と、是れ尋常愛國者の口吻である。然も此れは間違ひである。苟も國を愛するからには、其國の惡しきは、何處迄も之を矯正し、之を釐革し、之をして其惡より超脱せしめねばならぬ。此れが國民の自國に對する最初の義務である。故に我が日本國民の愛國心は、單に所謂る國自慢でなく、己惚根性でなく、眞に我が國體の精華を自覺し、國性の眞粹を會得し、而して自から進んで其の短所弱點を補ふことを勗むるにあらねばならぬ。即ち善も我國惡も我國でなく、善は我國、惡は我國より是を退治し去る、大國民の大襟度を持たねばならぬ。所謂る明治天皇の

國民の自國に對する第一義務

自覺して短所弱點を補ふ

明治天皇の御理想

帝國國體の中樞は萬世一系の皇室

愛國心の根本原理は終古一定不動

よきを採り惡しきを捨て、外國に劣らぬ國となす由もがな

との御理想を、其の御言葉通りに遵奉し、實踐するが、我が帝國を愛する第一歩と云はねばならぬ。

日本帝國は、決して其の國民に利益を分配する株式會社でもなく、又た國民は、株式會社の社員でもない。實に我が日本帝國は、世界唯一の國體を持つ、世界唯一の國である。而して其の國體の中樞は、我が萬世一系の皇室である。故に我が國民の愛國心の根本原理は、之を皇室中心主義に繋ぐを以て、適當の解釋と爲す。故に吾人の愛國心は、一夜作りの愛國心ではない。祖先以來幾千年の光榮ある歴史を有する愛國心である。此の愛國心は、時代の進歩と與に、其の形式を變じ、又た其の作用を變ずるも、其の根本原理に至りては、終古一定、決して搖ぐ可きものではなく、又た動かす可きものではない。



大正十四年一月十二日正午前十分

東京近郊大森山王草堂に於て

草莽の臣

徳富猪一郎

時に歳六十又三

明治十六年予熊本東郊大江草舎に在り小著の後に題して曰く

滿腹經綸任手裁 疎狂愧不濟民才

何時學取馬韓筆 萬里長江一瀉來

と回頭已に四十餘年未だ一事の爲す所無し。慚悔自ら禁ぜず。偶々本文を草し終り百感中より湧く。仍て口占前韻に次す。

祇今誰是濟時才 皓首壯心歌莫哀

碧海掣鯨吾曷敢 一腔熱血獻君來

大正十四年一月念午前五時 山王草堂電燈の下に於て

蘇峰迂夫

增補國民小訓終



慷慨 敢 開 天 下 口

分明 高 道 世 間 言

萬世一系の皇室に彌榮あれ、之を中心として團結したる日本國民に福昌あれ、開闢以來の獨立帝國たる日本國に幸運あれ、是れが著者の祈禱である。

然も著者の胸底には、一種の不安が蟠まりてゐるを告白せねばならぬことを、頗る遺憾とする。著者は黒雲が、我が日本帝國の上に渦巻いてゐるを見る。此れは著者一個の幻影である乎、迷像である乎。

その黒雲の一は、外患である。著者は今更此の外患に就て、詳しく語ることを憚る。されど如何なる樂天家たりとも、我が日本帝國の國際的位置は、安全であると、斷言し得る者はあるまい。吾人は決して恐怖症の患者ではない。されど我が帝國四圍の情態は、決して常脈であり、平調であると云ふを許さない。若し天氣豫報者の語を假りて云はん乎、明日天候異變ありと云ふの外はあるまい。低氣壓乎、高氣壓乎。その詳なるは、得て語る可きでない。されど誰しも好天氣の三字を、打出し得る者はあるまい。



吾人は輕卒に、國難來を大聲疾呼せんとする者ではない、されど日蓮をして、今日に在らしめば、彼は必ず立正安國論を著はすであらう。林子平をして、今日に在らしめば、彼は必ず三國兵談より以上の書を作らむ。我が帝國の對外關係は、決して平常ではない、否、全く異常である。現時の安靜は、暴風雨前の安靜にして、決して安靜其物ではない。

それよりも憂慮に勝へぬは、内憂である。内憂の重なる一は、階級的反目である。縦令外に向つて、叩頭政策、若くは隱忍政策を以て、其の禍機を、將來に推し延ばすことを得んも、内憂に至りては、既に我が眉端に迫り、而して刻々迫りつゝあるではない乎。此の階級的争鬭は、果して日本國民の團結力にひゞが入る氣遣ひなき乎。然も更により大なる内憂は、國民間に於ける思想の混亂である。此の混亂は、千古萬古、光を放ちつゝある我が國民的精神を、消磨する心配なき乎。

人各々思ふ所あり。若し各個に就て質さば、一家の内たりとも、其の思想の統一は、期す可からず。況や一國の大に於てをや。されば吾人は決して、世の所謂る思想統一なるものに與する程の没分曉漢ではない。されど國民として、其の自國に對して、根本思想を一にす可き必要は、固より云ふ迄もなし。其の根本思想の一致に於て、茲に始めて國民的一致を見出すではない乎。

然るに即今、我が思想界の情態を見れば、混亂の二字は、未だ全く之を盡せりと云ふ可からざる程である。否、寧ろ渾沌と云ふ可き程である。之を概説すれば、宛も高竿を立てたる如く、右傾せざれば左傾し、左傾せざれば右傾す。而して其の直幹亭々として、聳立するものは、殆ど稀である。

其の左傾者中には、或は米化者あり、或は露化者あり、或は平和熱好の極、降伏派となり、或は平等熱好の極、共產主義者となり、或は自由熱好の極、無政府主義者となり、或は博愛とか、人類同胞とかの、所謂る福音にかぶれて、自國を忘れ、自國同胞を閑却す



る者あり。而して其の何れも自國の歴史を無視し、若くは遺却するの點に於ては、皆な其の揆を一にしてゐる。

若し夫れ右傾派に至りては、必ずしも自國の歴史に關心せざるにあらず。されど彼等は、豆の如き眼孔を以て、之を讀み、毫も建國以來の巍々、蕩々、六合を家とし、四海を一とする大規模、大精神を會得せず。只だ極めて偏狹なる國民的精神に囚はれて、之を世界に擴充する所以を忘れ、徒らに榮螺の籠城、簞蟲の袋居、蟹の穴棲を以て、其の能事とするに至る。若し孟子をして、今日我が國の思想界を觀察せしめば、彼は必ず楊に之かざれば、墨に之くの嘆聲を發するであらう。

概して言へば、或者は國民的精神に逆上して、國際的精神を顧みず、或者は國際的精神に逆上して、國民的精神を顧みず。而して國民的精神を擴充すれば、國際的精神となり、國際的精神を煎じ詰むれば、國民的精神となり、自國に貢獻するは、世界に貢獻する所以にして、世界に貢獻するは、自國に貢獻する所以なるを解せず。此の如くし

て兩者交も相ひ軋轢す。

此の如く一方には、經濟的因由よりして、階級的の反目を來たし、他方には、思想的因由よりして、精神的の反目を來たす。此の如くして舉國一致、以て將に來らんとする國難に當らんとするも、亦た至難の事と云はねばならぬ。

著者は敢て叨りに、自ら中正の立場を占むる者とは任じない。されど著者は思想の系統に於て、歴史派に屬する者。彼の歴史を無視して、空理空想に駕し、自ら止まる所を知らざる者と、固より其の趨を殊にしてゐる。而して又た彼の歴史的發展の全體を大觀せず、只だ其の一局部に没頭して、宛も山中に彷徨して山を見ざる者と、道連れたること能はず。著者は唯だ、日本帝國の發展の歴史を辿りて、其の源頭に及び、更に其の源頭よりして、明治天皇の大御世に至り、我が帝國と國民との運命に就て、窃かに自ら信する所あり。敢て其の所信の一斑を披瀝して、我が同胞に警告せんが爲めに、此の小著を作した。



著者幼にして家學を受け、遲暮耳順を過ぐ、功名の念、轉た疎、固より世の政客と與に、當代に角逐するの意を絶つ。但だ文章報國の志、歳と與に愈よ切を加へ、自ら裁する所以を知らず、大正十四年一月元旦より稿を起し、一氣呵成にして、三十篇を作した。其の言の平凡にして、其の説の庸常なる、他の新人の驚時駭世、奇々怪々の創論異説と、頗る同じからず。或は陳套、爛熟の文として、唾棄する者もあらむ。されど著者の目的は、異にあらずして、平にあり、奇にあらずして、正にあり。著者は敢て天下の崇論高議者を對象とせず。只だ忠良なる、我が日本帝國の臣民たる諸君に向ひ、其の國民としての安心立命を得るの一助として立言す。それ豈に此の小著を以て、帝國の内憂外患を、一掃し去るものと云はん哉。

昨秋、吾兒萬熊の方に死せんとするや、予告げて曰く、安心して逝け、汝の働く可き丈の事は、乃父必ず之に任ぜんと。而して兒、首肯するものゝ如くして、瞑しぬ。爾來著者は快々として樂しまず。他に向つて強ひて言笑するも、心中には三斗の熱鐵を呑みものと云ふも、不可なし。

大正十四年一月十八日午後二時 逗子野史亭に於て

蘇峰學人

大正元年八月、即ち明治天皇崩御の刻下、著者は皇室中心主義なる新熟語の下に、我が國民の嚮往す可き大道標の建立を心掛けた。大正二年『時務一家言』を著した。大正五年には『大正の青年と帝國の前途』を著した。而して本書は、實に前二著と、其の系統を同じうするもの。若し頼ひに併讀せられんには、思ひ半ばに過ぐるものあらむ。著者は必ずしも同一思想を、蒸し返し、繰り返すにあらず。唯だ國家の大本大體に於ては、決して動かす可からざるものあるを信じ、切に之を闡明するの必要を感じたるのみ。



溯りて云へば、『皇室中心主義』の新熟語は明治四十一年十月刊行の改訂版『吉田松陰』の緒論第三に明記したるを以て嚆矢となす。今や此の新熟語が殆んど全國に普及せられ、一般の使用語となりたるは著者の尤も本懐とするところ。

昭和八年九月十六日 亡兒萬熊十周年忌日に際して

蘇峰七十一叟

# 涵情養氣集



教化の要は、知るにあらざ、好むにあり、好むにあらざ、樂むにあり。世往々理智を研ぐを以て、教化此に盡くと云ふ。焉ぞ知らん、是れ其の初歩であることを。所謂る教化の善を盡し、美を盡すものは、其の感情を涵し、其の氣象を養ふにあり。孟子が浩然の氣を養ふと云うたのは、此事だ。流石に孟子は大なる教育家である。

今ま茲に採録するは、日本人の詩歌中に於て、本書の内容と、何れも多少の因縁あるものに限る。選擇の標準此の如くなれば、其の巧拙の如きは、姑く論ぜずして可也。而して其の因縁あるものも、唯だ其の一斑に止まる。紙幅限りあれば也。



然も何人にもあれ、時々之を諷誦せば、其の高情を涵し、正氣を養ふに於て、必ず餘師あらむ。冠するに孝明天皇、明治天皇の御製、及び昭憲皇太后の御歌を以てす。御製、御歌、悉く皆な教化の基素たらざるはなし。本書は只だ其の標本として、纔に其の數首を敬録するに止む。

大正十四年一月十三日

蘇峰學人

孝明天皇御製

朝夕に民安かれと思ふ身の

心にかゝる異國の船

\* 維新の大業は、此の大御心より打出し來る。

白浪のたち騒ぐとも何かせむ

我が葦原は神風ぞ吹く

\* 國民的自信此に存す。

すまし得ぬ水に我が身は沈むとも

濁しはせじな四方の民草

\* 人君天職の極致、捧讀恐懼の至りに堪へず。

『孝明天皇』第百二十一代の天皇、天保二年六月十四日御降誕、弘化三年正月御踐祚、慶應二年十二月二十五日崩御、聖壽三十六。



掲 『明治天皇』前

明治天皇 御製

國の爲め仇なす敵は碎くとも  
いつくしむべき事な忘れそ

\* 仁者は敵無し。

事しあらば火にも水にも入らばやと  
思ふはやがて大和魂

\* 大和民族の本色。

千萬の民よ心を合せつゝ  
國に力を盡せとぞ思ふ

\* 學國一致。

波風の靜かなる日も船人は

楫に心をゆるさざらなむ

\* 油斷大敵。

あさみどり澄み渡りたる大空の  
廣きをおのが心ともがな

\* 天空海淵の氣象。

賢きも愚かもあれど人毎に

あらまほしきは誠なりけり

\* 至誠神に通ず至誠にして未だ動かさざる者なし。

山の端に懸れる雲も晴れ初めて  
登る朝日の影のさやけさ

\* 吾人の氣象も斯の如くありたきもの。



過を諫めかはして國の爲め

力を盡せますらをの友

\* 在朝在野各黨各派相互に此の心持を要す。

村肝の心の限り盡してむ

我が思ふ事なりもならずも

\* 人事を盡して天命を俟つ。

國民の力の限り盡すこそ

我が日の本の固めなりけれ

\* 國民協賛最善の力を竭すは是れ帝國を擁護する所以。

『昭憲皇太后』  
前掲

昭憲皇太后 御歌

とりぐにつくるかざしの花よりも

\* 誠實の徳。  
句ふ心の誠をぞ思ふ

霜を経てなほこそかをれ大君の

かざしとなりし白菊の花

\* 古今菊の歌中此の御歌を以て第一とす。

大宮の火桶のともさむき夜に

みいくさは人は霜やふむらむ

\* 三軍の士練を挟む。

浅しとて堰けば溢るゝ川水の

心や民の心なるらむ

\* 民意疏通輿論善導。



君と臣の心の色にうつさばや  
いつも變らぬ松の緑を

\* 君臣合體千秋萬古。

大伴氏の遠つ祖の歌へる

海行かば水づく屍 山行かば草むす屍 大王の邊に  
こそ死なめ 長閑には死なじ

\* 是れ日本國民歌の祖。以て歌ふ可く、以て吟ず可し。

不盡山を望みて

山 部 赤 人

天地の分れし時ゆ 神さびて高く貴き 駿河なる富  
士の高嶺を天の原 ふりさけ見れば 渡る日の影も  
隠ろひ 照る月の光も見えず 白雲もい行きはゞか  
り 時じくぞ雪は降りける 語りつぎ言ひつぎ行か

『山部赤人』柿  
本人麻呂と名  
を齊うする歌  
聖此歌尤も世  
に傳ふ

む 富士の高嶺は

反 歌

田子の浦ゆうち出て見れば眞白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける

\* 此れが富士の歌の絶調である。

防 人 の 妻

蘆邊ゆく雁のつばさを見る毎に

君がおはし、投箭し思ほゆ

\* 武士の妻は、かくある可きもの、かくありたきもの。

大 伴 家 持

丈夫は名をし立つべし後の世に

聞き繼ぐ人も語り繼ぐがね

『大伴家持』萬  
葉集撰者の一  
人として世に  
顯はる



菅原道眞字多醜兩朝に仕へ歿替する所多し延喜三年二月貶地太宰府に薨す年五十九

君が住む宿の梢をゆくくと

菅原道眞

\* 遷客となりて都門を出づる情緒何ぞ纏綿

素性法師京都の歌僧三十六歌仙の一人

臥して思ひ起きて數ふる萬世は

素性法師

\* 神明昭鑒

神ぞしるらむわが君のため

源順

源順和名類聚鈔十卷の著あり永觀元年歿す年七十三

古いぬれば同じ言こそせられけれ

君は千代ませ君は千代ませ

\* 至情豈に多言ならん哉

成尋法師入唐し侍りけるに

成尋法師母

唐土も天の下にぞ有ると聞く

照る日の本を忘れざらなむ

\* 今日のみ化英化獨逸化露西亞化の徒三思せよ

源實朝

源實朝頼朝の次子征夷大將軍承久元年公曉の爲に殺さる年二十八

山はさけ海はあせなむ世なりとも

君にふた心われあらめやも

\* 斯人にして斯歌あり

武夫の矢なみつくらふ籠手の上に

霰たばしる那須の篠原



『後嵯峨天皇』人皇第八十八代

後嵯峨天皇 御製

\*何等の雄快。

敷島や大和島根の朝がすみ  
唐土までも春は立つらし  
ひさ方の天よりおろす玉鉾の  
道ある國ぞ今のわが國

\*日本中心主義の御製、難有も誦し奉る。

宗尊親王

『宗尊親王』後嵯峨天皇の第二皇子、建長十一年七月薨、年三十三

ありて身の甲斐やなからむ國の爲め

民の爲めにと思ひなさずば

\*恐れながら洵に尊詠の通りと存す。

『龜山天皇』人皇第九十代

龜山天皇 御製

世の爲めに身をば惜まぬ心とも

荒ぶる神は照らし覽るらむ

\*是れ弘安の役、天皇が身を以て國難に代らんとの宸慮より出で來りたるもの。百世の下、尙ほ凛々たる生氣を拜し奉る。

宏覺禪師

末の世の末の末までわが國は

萬づの國にすぐれたる國

\*過去此の如し、現在此の如く、あらざる可からず、將來此の如く、あらざる可からず、是れ一に國民の勇猛精進による。

『伏見天皇』人皇第九十二代

伏見天皇 御製



『菊池武時』肥後の人後醍醐天皇時代の勤王者博多に戦死す年四十二子孫皆な王事に力む

徒らに安き我身ぞはづかしき  
苦む民の心おもへば

\* 民の父母たる大御心、歴代の皇徳皆な此の如し。

菊池武時

武夫の上矢のかぶら一筋に

思ふ心は神ぞ知るらむ

\* 断じて行へば鬼神も之を避く。

後醍醐天皇 御製

身にかへて思ふとだにも知らせばや

民の心の治めがたきを

\* 身にかへての御一句實に千鈞の重さあり。

楠正行

『楠正行』正成の子父の志を紹ぎ王事に力む正平三年正月四條畷に戦死す年二十三

かへらじとかねて思へば梓弓

なき數に入る名をぞとどむる

とても世にながらふべくもあらぬ身の

假りの契をいかで結ばむ

\* 前は太平記、後は吉野拾遺に出でてゐる。果して正行の作であるや

否やを詳にせず。されど兩首ともに、彼の殊勝の心が露はれてゐる。

尊圓法親王

百敷や砌の竹のふして思ひ

起きて祈るも我君のため

\* 常住坐臥君を遣れず。

宗良親王

『宗良親王』後醍醐天皇の皇子天台座主となる後諸國に轉戦終る所未詳新葉和歌集の撰あり

君の爲め世の爲め何か惜からむ



捨て、かひある命なりせば  
\* 捨て、甲斐あるの一句、字眼。

後龜山天皇 御製

『後龜山天皇』  
人皇第九十九代

あつめては國の光となりやせむ  
わが窓てらす夜半の螢は  
\* 螢光尙ほ然り、況や民心の光をや。

作者不知

虎と見て石に立つ矢もあるものを  
などか思ひの透らざるべき  
\* 精神一到何事不成。

後花園天皇 御製

『後花園天皇』  
人皇第一百二代

思へただ空に一つの日の本に  
又たぐひなく生れこし身を  
\* 日本國民たるの光榮。

太田持資

かゝる時さこそ命の惜しからめ  
かねてなき身と思ひ知らずば  
\* 勇士不忘喪其元。

新納忠元

あぢきなや唐土までもおくれじと  
思ひし事は昔なりけり  
\* 烈士暮年壯心不已。

石川丈山

『太田持資』道  
灌上杉持朝の  
臣最初の江戸  
城を築きて名  
あり和歌を善  
くす文明十八  
年七月害に遭  
ふ

『新納忠元』島  
津義久の臣秀  
吉九州征伐の  
時大口城を守  
る慶長十五年  
十二月歿す年  
八十五



『石川丈山』參河に生る京都に閑居藤原愷高に學び林羅山と親交あり詩を善くす寛文十二年五月歿す年九十

『後水尾天皇』人皇第百八代

後水尾天皇 御製

渡らじなせみの小川の淺くとも  
老の浪そふかげもはづかし

\*古の逸民。

祈りおく千年は世々に盡きもせじ

ありとあらむの一つ心に

\*その一つ心が大切である。

さ夜嵐四方の落葉は埋むとも

わけ行く道は知る人ぞ知る

\*大道達長安。

『熊澤了介』京都に生る叢山又は息遊軒と稱す中江藤樹に學び池田光政に仕へて治を擧ぐ元祿四年八月古河に歿す年七十三

熊澤了介

『徳川光圀』水戸藩主頼房の第三子尊王の首唱者大日本史を大成す元祿十三年十二月歿す年七十三

立ちならぶ山こそなけれ秋津洲

我が日の本の富士の高嶺に

徳川光圀

『釋契沖』大阪高津圓珠院の僧歌人にして國學に精し著書多し元祿十四年正月歿す年六十二

富士の嶺は山の王にて高御座

そらにかけたる雪のきぬがさ

\*二首富岳と其の崇高を争ふ。

釋契沖

『靈元天皇』人皇第百十二代

靈元天皇 御製

天照らす光に見よや日の本の

外までおよぶ神の恵は

\*神德洽六合。



へだてなき我が日の本の光をば  
他し國まであふがざらめや

\* 大なる哉皇謨。

荷田東滿

踏み分けよ大和にはあらぬから鳥の  
跡を見るのみ人の道かは

\* 米化者流以て如何と爲す。

賀茂眞淵

もろこしの人に見せばやみ吉野の

吉野の山の山ざくら花

うらくと長閑けき春の心より

匂ひ出でたる山ざくら花

\* 花乎、人乎、人乎、花乎。

高山正之

我を我と知ろしめすかやすべらぎの

玉の御聲のかゝる嬉しさ

\* 孤忠達天。

本居宣長

さしいづる此の日の本の光より

高麗唐土も春を知るらむ

敷島の大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

\* 前の眞淵の二首と、兄たり難く弟たり難し。

松平定信

〔荷田東滿〕山城伏見に生る春滿の後を繼ぎ家學を承く律令及び職官服制に精し寶曆元年八月歿す年四十六

〔賀茂眞淵〕縣居と稱す業を荷田東滿に受く古學の普及に力め國風を古昔に復す明和六年十月歿す年七十三

〔高山正之〕彦九郎と稱す上野國新田郡に生る氣節あり皇室の式微を嘆じ海内を週遊す寛政五年六月筑後久留米に自歿す年四十七

〔本居宣長〕伊勢松坂に生る鈴屋と稱す東滿眞淵契沖の志を繼ぎて和學を大成す著書甚だ多し享和元年九月歿す年七十二



『松平定信』白河城主松平定邦の嗣樂翁と稱す學を好む老中となり幕政を釐革す文政十二年五月歿す年七十二

『光格天皇』人皇第一百九代

『賀茂季鷹』京都上賀茂の祠官加藤千蔭に交り學びて名聲著はる天保十三年九月歿す年九十一

この船のよるてふ事を夢の間も

忘れぬは世の寶なりけり

青柳の絲の亂れを春風の

ゆたかなる世に忘れずもがな

\* 治に居て亂を忘れず。

光格天皇 御製

霞たつ大内山の朝日影

春の光は四方に満つらし

\* 陽春布德澤。

大日本神代ゆかけてつたへつゝ

賀茂季鷹

思ひはる人雄々しき道ぞたゆみあらすな

\* 雄々しき道是れ神ながらの道。

平田篤胤

青海原潮の八百重の八十國に

つきてひろめよこの正道を

\* 人能弘道。

香川景樹

すべらぎは現つ神なり秋津洲

動くべき世のあらむと思ふな

\* 天壤と與に極り無し。

藤田彪

玉銚のみちのくこえて見まほしき

『藤田彪』水戸藩士幽谷の子東湖と號す藩主烈公の知

『平田篤胤』出羽秋田久保田城下に生る出で平田氏を嗣ぐ神祇道の學頭となる大扶桑國考其他著書百餘部あり天保十四年閏九月歿す年六十八

『香川景樹』鳥取に生る出でて香川家を嗣ぐ桂園と稱す清水貞固に學び一派を立つ新學異見其他の著書あり天保十四年三月歿す年七十六



な受け藩政に  
參與す安政二  
年十月の大地  
震に歿す年五  
十

『徳川齊昭』水  
戸藩主景山又  
た烈公の稱あ  
り封を襲ぐや  
英明果斷藩政  
を釐革す尊王  
の念厚く海防  
に努む弘道館  
を建て文教を  
興す萬延元年  
八月歿す年六  
十一

『佐久良東雄』  
常陸の國學者  
通稱靱負齋園  
と號す萬延元  
年捕へられ絶  
食して歿す年  
五十

『佐久間啓』信  
州松代藩士象  
山と號す海防  
八策を上る開

港論の先達元  
治元年七月京  
都にて刺客に  
殺さる年五十  
四

『吉田矩方』山  
口藩士出で、  
吉田家を嗣ぐ  
名は寅二郎松  
陰と稱す松下  
村塾を開き子  
弟を教授す關  
西志士の魁と  
して尤も著は  
る遺著頗る多  
し著者の『吉  
田松陰』を參  
照せよ安政六  
年十月江戸に  
刑に就く年三  
十

『久坂通武』山  
口藩士名は義  
助玄瑞と稱す  
吉田松陰に學  
び尊攘の大義  
を唱道す元治  
元年六月京都  
蛤御門の變に  
歿す年二十六

\* 東湖先生の本色。

蝦夷が千島の雪のあけぼの

徳川齊昭

敵あらばいで物見せむ武夫の

彌生なかばの眠り覺しに

佐久良東雄

\* 誤つて武を驢すと做す勿れ。

君がため命死ぬべき益荒雄と

なりてぞ生けるしるしありける

佐久間啓

\* 是れ日本男兒本色の語。

思ひ知る人もありなむ年ふとも

軒のしのぶよ色な變りそ

\* 古道照顔色。

吉田矩方

斯くすれば斯くなるものと知りながら

已むに已まれぬ大和魂

\* 則は大和魂

親を思ふ心にまさる親心

今日のおとづれ何と聞くらむ

\* 忠臣則孝子、孝子則忠臣。

今日もまた知られぬ露の生命もて

千歳を照らす月を見るかな

久坂通武



\* 人生不滿百、恒懷千載憂。  
時鳥血に啼く聲は有明の

月より外に聞くものぞなき

\* 杜鵑の歌、之を第一と爲す。

わが胸の燃ゆる思にくらぶれば

烟はうすし櫻島山

青雲のむかふす極すめろぎの  
御稜威輝く御代になしてむ

\* 回天の偉業、此の如き志士によりて促成せられた。

ますらをの屍草むす荒野らに

咲きこそ匂へ大和なでしこ

\* 何等の風情

武夫の大和心をより合せ

末一筋の大綱にせよ

\* 舉國一致

あすも来て見むと思へば家つとに

手折るもをしき山櫻花

\* 樂は現在望は將來

わが袖の玉と拾ひて包まばや

『平野國臣』名は次郎京攝の間に奔走し、國事に盡す。文久三年十月生野に擧兵。元治元年七月刑に就く。年三十七。

平野國臣  
伴林光平

『野村望東尼』福岡城下に生る和歌を善くす。高杉晋作其他志士の急を救ふ事屢々なり。慶應三年十一月三田尻に病死す。年六十二。

野村望東尼  
太田垣蓮月  
福田行誠



うちつけられし石も瓦も  
\* 聖者の胸襟

三條實美

『三條實美』實  
萬の子維新以  
來大業を輔翼  
し太政大臣に  
任じ國家の元  
勳たり明治二  
十四年二月薨  
す年五十五

萬代の名こそ惜しけれうつ蟬の  
世の人はさもあらばあれ  
\* 一時の毀譽萬世の豊碑

岩倉具視

『岩倉具視』堀  
川康親の二子  
出で、岩倉家  
を嗣ぐ大政復  
古に尤も偉功  
あり以來要職  
に膺り獻替す  
る所多大明治  
十六年七月薨  
す年五十九

天地のそきたつきはみ照らすべき  
この日の本の武士やたれ  
\* 豈に其の人無からん哉

勝安芳

かけとめむ千曳の碇つなをなみ  
漂ふ舟の行方知らずも  
\* 急流中の抵柱

つらきにも憂きにも更にたゆまねど  
力なきこそ我が恨みなれ  
\* 只だ養力の一途あるのみ

『勝安芳』海舟  
と號す徳川幕  
府最後の政治  
家西郷隆盛と  
江戸城受授の  
事尤も世に傳  
ふ明治三十二  
年一月薨す年  
七十七



『弘文天皇』人皇第三十九代

弘文天皇 御製

皇明光日月。帝德載天地。

三才並泰昌。萬國表臣義。

\*是れ皇太子として天智天皇の御宴に侍し給うたる際の一絶。

後夜聞佛法僧鳥

空

海

閑人獨坐草堂曉。三寶之聲聞一鳥。

一鳥有聲人有心。聲心雲水俱了了。

\*今日高野山上、尙ほ此の鳥聲を聞く者あらむ。然も聲心雲水俱了了の者果して幾人ぞ。

九月十日

菅原道真

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。恩賜御衣今在此。捧持日日拜餘香。

『菅原道真』前掲

『空海』讚岐に生る眞言宗の開祖高野山の開山弘法大師承和二年三月寂す壽六十二

\*一飯君を忘れず。

不出門

一從謫落在柴荆。萬死兢兢踟躕情。

都府樓纔看瓦色。觀音寺只聽鐘聲。

中懷好逐孤雲去。外物相逢滿月迎。

此地雖身無檢繫。何爲寸步出門行。

\*怨みて怒らず。冤を含んで尙ほ自ら省みる。是れを臣節の極致と爲す。

鎌倉聞驚蟄

道

元

半年喫飯白衣舍。老樹梅花霜雪中。

驚蟄一聲轟霹靂。帝鄉春色小桃紅。

\*這漢到底霸府藥籠中の物たらず。

『道元』久我通親の子曹洞宗の開祖興聖永平兩寺の開山。蓋佛法國師明治年間承陽大師と追諡建長五年八月寂す壽五十四



『辨圓』駿河に

生る字は圓爾  
京都東福寺の  
開山賜聖一國  
師弘安三年十  
月寂す壽七十  
九

和元菴印最明平元帥約

大機大用大根人。鼻孔遼天獨露身。  
凜凜威風行闔外。五湖四海一天眞。

\* 此句にあらざれば最明寺入道時頼に値るに足らず。

辨

圓

『友梅』越後に

生る雪村と號  
す京都建仁寺  
に住す建武二  
年十二月寂す  
壽五十七

金雞聲裡啓重關。對面巍々萬疊山。

一步步登孤絕頂。紅輪初上海雲間。

\* 何等の偉觀何等の壯觀。

友

梅

『元光』美作に

生る寂室と號  
す近江永源寺  
の開山諡圓應  
禪師正平廿二  
年九月寂す壽  
七十八

山居

不求名利不憂貧。隱處山深遠俗塵。

歲晚天寒誰是友。梅花帶月一枝新。

\* 眞に是れ高僧の詩。

元

光

『疎石』伊勢源

氏の子夢窓と  
號す嵯峨天龍  
寺の開山賜普  
濟國師正平六  
年九月寂す壽  
七十七

山居

青山幾度變黃山。浮世紛紜絕不干。

眼裏有塵三界窄。心頭無事一牀寬。

\* 誰か心頭無事なるを得る者ぞ。

疎

石

『仲方』長州に

生る關室と稱  
す南嶺越を嗣  
ぎ瑞龍建仁に  
住す應永二十  
年八月寂す壽  
六十

覽鏡

壯歲竊期天下奇。宗門九鼎欲扶危。

朝來笑向鏡中間。白髮蒼顏汝是誰。

\* 登に嘗だ宗門の九鼎のみと云はん哉天下後世此感を同じくする者必ず少からざる可し。

仲

方

『大智』肥後に

生る加賀祇陀  
寺の開山正平  
二十一年十二  
月寂す壽五十  
四

富士山

巍然獨露白雲間。雪氣誰人不覺寒。

八面都無向背處。從空突出與人看。

大

智



\* 富士山詩中有數の佳什。  
 截斷人間是與非。白雲深處掩柴扉。  
 當軒栽竹別無意。祇待鳳凰來宿時。

\* 何等の抱負。

賦熊野三山應制

仲

津

『仲津』土州に  
 生る絶海と號  
 し蕉堅道人と  
 稱す戒を夢窓  
 に受く惠林等  
 持萬年南禪に  
 住す明徳十二  
 年四月寂す壽  
 七十

熊野峰前徐福祠。滿山藥草雨餘肥。  
 只今海上波濤穩。萬里好風須早歸。

\* 是れ明の太祖皇帝の制に應ずるの作。絶海の詩。雪舟の畫共に足利  
 時代に於ける。入明者の絶技と爲す。

相府席上

年來縛屋住山中。路自白雲深處通。  
 不用世人傳世事。閒懷只慣聽松風。

\* 俗界の士。二誦清涼散に當つ可し。

退院

師

練

『師練』京都に  
 生る虎關と號  
 す三聖東福南  
 禪に住す貞和  
 二年七月寂す  
 壽六十九

浮雲南北有離合。人生古今多是非。  
 離合是非都不管。百花深處一僧歸。

\* 徒手來、徒手去。

應制富士山

景

三

『景三』西國に  
 生る横川と號  
 す等持相國南  
 禪に住す明應  
 二年十一月寂  
 す壽六十五

莫言北闕隔東關。富士朝朝如對顏。  
 四海一家皆帝力。千秋白雪御前山。

\* 賦し得て體を得たり。帝力に歸する所尤も妙。

致仕

藤

原

實

隆

二十年來朝市塵。扁舟歸去五湖春。  
 平生慚愧無功業。合對白鷗終此身。

\* 好絶句。

『藤原實隆』内  
 大臣公保の次  
 男詩歌を善く  
 す天文六年歿  
 す年八十三



『細川頼之』頼春の子足利義満の謀臣書を好み詩歌に長ず元中九年歿す年六十四

偶作

人生五十愧無功。花木春過夏已中。  
滿室蒼蠅掃難去。起尋禪榻臥清風。

細川頼之

\* 原作中は空難は不臥は把に作る。今ま山陽の改作に従ふ。

能州營中作

上杉輝虎

『上杉輝虎』長尾爲景の第二子上杉氏を討し不識庵謙信と號し春日山城に住す天正六年三月歿す年四十九

霜滿軍營秋氣清。數行過雁月三更。  
越山併得能州景。遮莫家鄉念遠征。

\* 是れ亦た日本外史の所記に従ふ。

無題

伊達政宗

『伊達政宗』頼宗の子仙臺城に住す其臣支倉常長を羅馬に遣る寛永十三年五月歿す年七十三

邪法迷邦唱不終。欲征蠻國未成功。  
圖南鵬翼何時奮。久待扶搖萬里風。

\* 泰平の奸雄。亂世の豪傑。

『新納忠元』前掲

偶作

吾生二十七春風。吹入新叢花亦紅。  
豈無三分割據略。英雄不顧草廬中。

新納忠元

\* (吾生一作巾車)自ら孔明を以て任ず。

有感

山崎嘉

坐憶天公洗世塵。雨過四望更清新。  
光風霽月今猶古。只缺胸中灑落人。

\* 正に是れ闇齋先生の詩。

飲友人宅

伊藤維楨

向來歲月似奔流。事事相催歸白頭。  
老去自知入佳境。一年勝似一年秋。

\* 進境あるもの此の如し。

『伊藤維楨』仁齋又古義堂と號す京都に古學を唱へ孔子を祖述す盛名一世に布く寶永二年三月歿す年七十九



「貝原元瑞」福  
岡藩士存齋と  
號す益軒の兄  
學を好み節操  
あり元祿八年  
十二月歿す年  
七十四

三月盡

今年花時今宵難。衰老難期來歲春。  
風光別我我何恨。留與後人千萬春。

\* 眞に是れ仁者の言而して又た解脱者の言。

貝原元瑞

「源 君美」新  
井白石なり徳  
川時代の碩學  
將軍家宣の侍  
講著書中藩翰  
譜折焚柴記尤  
も世に著はる  
享保十年五月  
歿す年六十九

題 自 像

蒼顏如鐵鬢如銀。紫石稜稜電射人。  
五尺小身渾是膽。明時何須畫麒麟。

\* 宛然白石先生自畫像。

源 君 美

「物 茂卿」萩  
生徂徠なり自  
ら復古の學と  
稱して一家を  
立つ將軍吉宗  
竝に柳澤吉保  
に用ゐらる二  
辨論語徴の外

甲府即事

甲陽美酒綠葡萄。霜露三更滿客袍。  
須識良宵天下少。芙蓉峯上一輪高。

\* 徂翁亦た此句を作る。日本魂の消磨せざる所以。

物 茂 卿

著書頗る多し  
享保十三年一  
月歿す年六十  
三

九月九日作

琪樹連雲秋色飛。獨憐幽菊近柴扉。  
登高欲賦知誰是。海內文章落布衣。

\* 眼中無人

梁 田 邦 美

「梁田邦美」蛭  
巖と號す赤石  
藩の儒官當時  
朝儒の稱あり  
寶曆七年七月  
歿す年八十六

鴻門高

鴻門高、高且雄。天曆數、指顧中。謀臣不語目屢動。劍舞双  
双鬪白虹。屠兒一入四座傾。卮酒斃肩醒風生。君不見俎  
上之肉飛生翼。却望天際成五色。

\* 鴻門會の縮圖、結末の二句意表に出づ。全篇皆な振ふ。

口 號

忽叩玄關騎白龍。俯看雲壑萬株松。  
悠然長嘯天風起。身在芙蓉第一峰。

\* 帝掬崑崙雪の五絶に勝る萬々。

秋 儀



新羅三郎吹笙足柄山圖

漢室將軍賦遠征。虬鬚颯爽夜吹笙。  
鐵衣忽見秋風起。月白關山草木鳴。

\* 賴山陽詠史の先を作す。

神武陵

柴 邦 彦

遺陵纔問路人求。一半死孤松半畝丘。不有聖神開帝統。  
誰教品庶脫夷流。廐王像設專金閣。藤相墳塋層玉樓。  
百代本枝麗不億。誰能此處一回頭。

月夜步禁垣外聞笛

上苑西風送桂香。承明門外月如霜。  
何人今夜清涼殿。一曲霓裳奉御觴。

\* 二首俱に栗翁の本色。寛政三博士の魁たる所以、此れに在り。

宿生田

菅 晋 帥

千歲恩讎兩不存。風雲長爲弔忠魂。  
客窓一夜聽松籟。月暗楠公墓畔村。

\* 楠公墓畔の作、此を第一と爲す。

玉水路上

南都山翠北都連。淀水斜通笠置川。  
壞道久無鑿輅過。當歸芍藥滿春田。

\* 意在言外。風韻絶調。

遊芳野

頼 惟 柔

萬人買醉攪芳叢。感慨誰能與我同。  
恨殺殘紅飛向北。延元陵上落花風。

\* 芳野懷古の詩長篇大作。儂指に違あらず。然も辭約にして義嚴なる

は、此に及ぶものなし。

「柴 邦彦」柴野栗山なり。昌平學の教官となり。學政を料理す。文化四年十二月歿す。年七十四。

「菅 晋帥」茶山なり。郷里備後神邊に塾を開き。子弟を教授す。詩名一時に重し。文政十年十月歿す。年八十。

「頼 惟柔」香坪又た春草と號す。經詩に長ず。廣島藩の儒員となり。郡宰の事を攝す。天保五年歿す。年七十九。



頼 襄 春水の子安齋の人山陽又は三十六峰外史の號あり京都に住し詩文に長ず日本外史尤も世に著はる其他の著者な世教に益あり天保三年九月歿す年五十三

蒙古來

頼

襄

筑海颶氣連天黑。蔽海而來者何賊。蒙古來。來自北。  
東西次第期吞食。嚇得趙家老寡婦。持此來擬男兒國。  
相模太郎膽如甕。防海將士人各力。蒙古來。吾不怖。  
吾怖關東令如山。直前斫賊不許顧。倒吾檣。登虜艦。  
擒虜將。吾軍喊。可恨東風一驅附大濤。不使羶血盡。  
膏日本刀。

\* 予露國に遊び杜翁の席上に於て之を吟ずる既に三十年に垂んとす予亦た老いんとす然も一念此詩に至れば今尙ほ案を拍つて起舞せんとするの概あり。(大正十四年一月十七日記)

楠公別子圖

海甸陰風草木腥。史編特筆姓名馨。  
一腔熱血存餘瀝。分與兒曹灑賊庭。

\* 露骨の語却て妙。

仲秋無月侍母

不同此夜十三回。重得秋風奉一卮。  
不恨尊前無月色。免看兒子鬢邊絲。

\* 眞に是れ孝子の詩。

攝州路上

酒家粉壁映晴波。官道乾沙度淤河。  
風景依然人欲老。楠公墓下十經過。

\* 景あり情あり。

重奉母遊芳野

前度尋春花已闌。今來暖雪照人顏。  
十年纔補平生缺。奉母重遊芳野山。  
侍與下阪步遲遲。鶯語花香帶別離。  
母已七旬兒半百。此山重到定何時。



疊疊春山別有天。 花開花落鎮依然。  
可憐萬樹香雲暖。 曾護南朝五十年。

\* 誦し來り、人をして忠愛の情油然而たらしむ。

胄山歌

胄山昨送我。 胄山今迎吾。 默數山陽十往返。 山翠依然我  
白鬚。 故鄉有親更衰老。 明年當復下此道。

\* 予此詩を誦する毎に、淚岑々下る。而して其の何故たるを知らず。

拜桓武陵

十萬人家烟火蒸。 龍蟠虎踞勢峻嶒。  
不知耕鑿由誰力。 春草茫茫延曆陵。

\* 遺老の本領隨處に發揮せらる。

題通議後

一穗寒燈萬古情。 膝穿木榻老書生。  
縱論寫到關心處。 奮筆行行紙有聲。

\* 一作肉食謀存誰置評。自嘲多事老書生。一窓風雪妻兒臥。奮筆燈前紙有聲。然も寧ろ原作を以て勝れりと做す。

聞美理哥夷船至相州浦賀港。慨然有作。時癸丑六月也。

梁 孟 緯

「梁 孟緯」梁  
川星巖なり美  
濃人近世詩家  
の泰斗慷慨時  
弊を憂ふ安政  
五年九月歿す  
年七十

一道礮聲雷震天。 邦家從此事騷然。  
何須警報方爲備。 轉海書來已十年。

\* 遠慮なき者は、近憂あり。

聞嘆咭喇取靈鷲山金像歸其國

洋夷載去片帆輕。 丈六黃金草一莖。  
方便神通施不得。 可憐天竺古先生。

\* 嘲り得て痛快。

紀事二十五首 錄一

更無一議及兵戈。 怯懦因循可奇何。



聞說江門此時節。滿城齊唱太平歌。

\* 皓首愛國先生在。

偶作

人馬皆肥家亦肥。更無一語及軍機。

大西洋外君知否。十萬妖鯨跋浪飛。

\* 姑息偷安の輩、今猶ほ古の如し。

藤田彪前掲

正氣歌

藤田彪

天地正大氣。粹然鍾神州。秀爲不二嶽。巍巍聳千秋。  
 注爲大瀛水。洋々環八洲。發爲萬朶櫻。衆芳難與儔。  
 凝爲百練鐵。銳利可斷釜。蓋臣皆熊羆。武夫盡好仇。  
 神州孰君臨。萬古仰天皇。皇風洽六合。明德侔太陽。  
 不世無汗隆。正氣時放光。乃參大連議。侃々排翟曇。  
 乃助明主斷。燄々焚伽藍。中郎嘗用之。宗社磐石安。

清磨嘗用之。妖僧肝膽寒。忽揮龍口劍。虜使頭足分。  
 忽起西海颶。怒濤殲胡氛。志賀月明夜。陽爲鳳輦巡。  
 芳野戰酣日。又代帝子屯。或投鎌倉窟。憂憤正悵々。  
 或伴櫻井驛。遺訓何慙慙。或殉天目山。幽囚不忘君。  
 或守伏見城。一身當萬軍。承平二百歲。斯氣常獲伸。  
 然方其鬱屈。生四十七人。乃知人雖亡。英靈未曾泯。  
 長在天地間。隱然叙彝倫。孰能扶持之。卓立東海濱。  
 忠誠尊皇室。孝敬事天神。修文與奮武。誓欲清胡塵。  
 一朝天步艱。邦君身先淪。頑鈍不知機。罪戾及孤臣。  
 孤臣困葛藟。君寃向誰陳。孤子遠墳墓。何以謝先親。  
 荏冉二周星。唯有斯氣隨。嗟予雖萬死。豈忍與汝離。  
 屈伸付天地。生死復奚疑。生當雪君寃。復見張綱維。  
 死爲忠義鬼。極天護皇基。



\*是れ則ち好個の日本帝國禮讚の詩。

書懷

來往風塵三十春。功名毫不屬斯身。  
自嘲今歲尙無立。鐵面丹心僅偉人。

\*是れ東湖先生三十歳の作其の抱負想ふ可し。

遷上幽居

高樓連水水連空。駿岳常山指顧中。  
誰識疎簾半垂處。三秋風物老英雄。

夜坐

金風颯々釀群陰。玉露溥々滴萬林。  
獨坐三更天地靜。一輪明月照丹心。

\*二首俱に先生の本色を露呈し來る。

『佐久間啓』前掲

雜感

佐久間啓

東邊拓地三千里。曾效荷蘭設學科。  
吾邦空說英雄跡。百歲無人似伯多。

\*正に是れ象山先生の詩。

題那波利翁像

何國何代無英雄。	平生欽慕波利翁。	邇來杜門讀遺傳。
忽忽不知年歲窮。	撫劍仰天空慨憤。	世人那得察吾衷。
如今邊警日復月。	戰船來去海西東。	外蕃學藝老且巧。
我獨遊戲等孩童。	守株未知師他長。	矮舟誰能操元戎。
嗟君原是一書生。	苦學遂能長明聰。	一朝照破當時蔽。
革蔽除害民情從。	旌旗所向如靡草。	威信普加歐羅中。
元主西征不足道。	豐公北伐何得同。	人生得意多失意。
大雪翻手朔北風。	帝王事業雖未終。	收爲我將應有庸。
世人心竅小於豆。	齷齪寧知英雄胸。	自奮能成遠大計。



自屈難樹廓清功。安得起君九原下。同謀戮力駢奸兇。  
終卷五洲皈皇朝。皇朝永爲五洲宗。

\* 曰く伯多、曰く那波利翁、先生眼孔の注ぐ所、當時に於て實に他の志士學者より高き數等。

題伯顏像

善斷善謀無失計。万千將士仰如神。  
即今天下遭多難。苦憶當年雄略人。

\* 是れ文久三年の秋、召に應じて京都に赴く際の作、先生の自ら任ずる所甚だ大なるを見る可し、文久三年は實に予が生誕の歲、今を距る六十三年也。

讀北畠公正統記

横井時存

百王掲出正閏明。大筆冠以正統名。公著此書何心情。欲  
向千秋說不平。君不聞建武之亂慘毒滿天地。何物獼猴掠

『横井時存』名は平四郎小楠と號す肥後藩士越前春嶽公の知を受く開國論著として著はる明治二年正月京都に刺客の爲に殺さる年六十一

神器。四海盡成魑魅嶺。南山僅存勤王志。先皇吞恨按劍崩。親拜遺詔老臣淚。乃棄衣冠執甲兵。起向東西勤王事。睢陽孤守苦戰危。賀蘭觀望責以義。百敗不摧氣益振。出將入相白霜鬢。棗蓐未曾向地委。無奈南風屢不競。武人獸心何足尤。冠冕不復辨正閏。以賊當劍己當璽。何等醜穢滅天性。嗚呼南山雖偏神器之所存。正統天子萬乘尊。今世假令翻黑白。天定萬世有公論。憤悲述作正統記。字々渾見血淚痕。嚴然大義匹春秋。讀之千秋聲空吞。正閏雖殊皇統一。鴻號無窮照乾坤。明幽不隔九原下。可愍一點忠愛魂。

\* 洵に親房卿述作の眞意を得たるもの。世或は小楠先生を以て、我が國體を潰す論者となし、先生遂に此れが爲めに奇禍に罹る。然も先生の精神、尊王にありしこと、此の一篇を見て知る可しと云爾。

題楠公圖



古今殉國士如林。心事茫茫不可尋。  
君自天成好男子。奚曾一點愛名心。

\* 先生が自ら小楠と號する所以、亦た此の句中に於て見る可し。

偶作二首

帝生萬物靈。使之亮天功。

所以志趣大。神飛六合中。

道既無形體。心何有拘泥。

達人能明了。渾順天地勢。

\* 小楠先生の時流に卓越したる所以此に存す。

偶成

群嶽亂山總草茸。奇觀何處立斯筇。

愛來大丈夫心事。寄在芙蓉第一峰。

\* 獨坐大雄峰。

河内途上

菊池保定

南朝古木鎖寒扉。六百春秋一夢非。

幾度問天天不答。金剛山下暮雲歸。

\* 山色依然人物非。

癸丑十月朔拜鳳闕肅然作之。時余將西走入海。

吉田矩方

山河襟帶自然城。形勝依然舊神京。今朝盥嗽拜鳳闕。

野人悲泣不能行。上林黃落秋寂寞。空有山河無變更。

聞說今上聖明德。敬天憐民發至誠。鷄鳴乃起親齋戒。

祈掃妖氛致太平。安得天詔敕六師。坐使皇威被八紘。

從來英皇不世出。悠悠失機今公卿。人生如萍無定在。

何日重拜天日明。

\* 其題を見れば、是れ先生が長崎に赴き、露艦に搭じて、海外に遊ばん

「菊池保定」溪琴と號し後ち海莊と改む紀伊の人博く經史に涉り勤王の志あり明治十四年一月歿す年八十三

「吉田矩方」前掲



とする途次の作たるを知る。

狂 愚

狂愚誠可愛。才良誠可虞。狂常銳進取。愚常疎避趨。  
才多機變士。良多鄉原徒。流俗多顛倒。目人古今殊。  
才良非才良。狂愚豈狂愚。

\* 狂愚の爲め氣焰を吐く。

松下村塾 聯

自非讀萬卷書。寧得爲千秋人。  
自非輕一己勞。寧得致兆民安。

\* 先生其人。

偶 作

季世威權歸將門。將門受侮屈夷蕃。  
九重勅發萬邦震。今日始知天子尊。

\* 維新興國の第一聲。

偶 成

半生落魄客山東。語盡人間達與窮。  
浴罷閒居無一事。臥看星斗滿秋空。

\* 二十八宿胸中に羅る。

西洋雜詠 錄一

男兒豪勇尙功名。不似唐人悲遠征。  
南戰北攻休不久。更之碧海掣長鯨。

\* 先生更に我國を率ゐて其上に出でしめんと欲す。其志大なりと云

ふ可し。

對 月

神理微茫不可尋。祇應白飲作孤斟。  
殷勤一片千秋月。照我悠悠萬古心。

\* 東湖の詩久坂の歌此詩を合せて志士對月の三佳什と爲す。

「橋本綱紀」左  
内景岳と號す  
福井藩醫の子  
藩政に參與す  
京都に上り公  
卿有志の間に  
幹旋畫策す安  
政六年十月江  
戸に刑に就く  
年二十六

橋本綱紀



獄中作三首 錄二

苦冤難洗恨難禁。俯則悲傷仰則吟。  
昨夜城中霜始隕。誰知松柏後凋心。  
二十六年如夢過。顧思平昔感滋多。  
天祥大節嘗心折。土室猶吟正氣歌。

\* 天下の奇才を殺す。予は井伊大老の其終を全うせざりしことの偶然ならざるを信ず。

有感

久坂通武

青年何事徒飄然。鳩車竹馬送流年。  
春野風和放紙鳶。十四不幸母就木。  
十五家兄隨父亡。醫林繼職杏花場。  
胸臆不蓄療人方。維歲十八爲何效。  
日月如馳志難償。百感懷舊夢一覺。  
於君未忠親未孝。黽勉一語記荀卿。

「久坂通武」前掲

積水成淵蛟龍生。

\* 此詩江月齋集の上駟にあらず。然も十八歳の作其の立志の凡ならざるを見る可し。

九月二十三日 時寓伏水

螻蟻千言草未終。滿胸悲憤與誰同。  
鏗然半夜起投筆。月在秋灣寒水中。

\* 覺えず人をして起舞せしむ。

弔久坂義助先師嘗稱義助曰青年第一流。高杉暢夫

埋骨皇城宿志酬。精忠苦節足千秋。  
欽君卓立同盟裏。不負青年第一流。

\* 斯人にして斯評あり。

馬上偶成

臨險臨危豈恃衆。單身孤馬亂丸中。

「高杉暢夫」晉作東行と號す山口藩士吉田松陰に學ぶ奇兵隊を組織し總督に任ず征長幕軍と善戰慶應三年四月病歿す年二十九



沙邊枕甲腥風夕。幽夢悠悠到海東。

\* 氣魄天の如し。

「勝安芳」前掲

詠亡友南洲西郷氏

勝安芳

亡友南洲氏。風雲定大是。拂衣故山去。胸襟淡如水。  
悠然事躬耕。嗚呼一高士。豈意紊國紀。甘受叛賊訾。  
笑擲此殘骸。以付數弟子。毀譽皆皮相。誰能察微旨。  
唯有精靈在。千歲存知己。

\* 海舟と南洲とは所謂る好漢好漢を知り、惺々惺々を識るもの。彼等

兩人の心事は、只彼等兩人相許し、相諒とするのみ。海舟翁別に琵琶歌城山曲あり。其音悲壯其詞慷慨。四絃弾じ來り、聽者をして皆な泣を飲ましむ。斯詩亦た琵琶歌と其意を同じうす。知らず兩雄の微旨を察する者、今焉くに在る。

逸題

芙蓉聳碧旻。對此須養眞。擾擾遂何事。時危思偉人。

\* 今日の日、正に是れ。

懷舊

副島種臣

大艦堂堂壓海潮。鯤鵬雄據北溟遙。黑龍殺氣通烏魯。  
銀漢狂波駕鵲橋。持節將軍猶按劍。皇華使者蚤班朝。  
只今骨與肉先朽。爭奈故人俱寂寥。

贈人

金華松島奧東頭。自古風雲向北愁。  
日本中央碑字在。祇今韎鞞入何州。

\* 二首共に先生股憂の存する所を見る。先生をして、今日にあらしめば、其の眼孔は未だ必ずしも直北に注がず、別所に注がむ。

進步圖

中村正直

「副島種臣」佐賀藩士蒼海と號す操行清廉を善くす明治功臣の一人明治廿八年一月歿す年七十八



〔中村正直〕敬  
宇と號す江戸  
に生る同人社  
を聞き又た明  
六雜誌を出す  
著譯の書多し  
西國立志編自  
由之理況く世  
に行はる明治  
廿四年六月歿  
す年六十

〔西郷隆盛〕鹿  
兒島藩士吉之  
助と稱し南洲  
と號す維新三  
傑の一人明治  
十年西南の亂  
を興し九月陣  
歿す年五十一

兩山夾帶路偏仄。如往而回轉折百。忽見老牛駕車來。  
運輸米粟載充積。進步難兮進步遲。終不退兮終不息。  
不問千里更萬里。能自極南達極北。人生進步亦如此。  
任重道遠耐艱厄。有時快馬行平地。常恐中途或顛踣。  
不如殼鯨任脚行。得寸則寸尺則尺。君不見泰西開化  
非速成。累世勤苦臻此域。

\* 豈に嘗だ泰西の開化のみならん哉。日本帝國の今日ある亦た我が  
祖先以來累世勤苦の效果のみ。

偶 成

西 郷 隆 盛

幾歷辛酸志始堅。丈夫玉碎愧輒全。  
吾家遺法人知否。不爲兒孫買美田。

\* 南洲先生の本領。  
月照十七回忌辰

相約投淵無後先。豈圖波上再生緣。  
回頭十有餘年夢。空隔幽明哭墓前。

\* 死生相許す。

逸 題

白髮衰顏非所意。壯心橫劍愧無勳。  
百千窮鬼吾何畏。脫出人間虎豹群。

\* 先生の心事以て想ふ可し。

偶 成

一貫唯唯諾。從來鐵石肝。貧居生傑士。勳業顯多難。  
堪雪梅花潔。經霜楓葉丹。若能識天意。豈敢自謀安。

\* 先生の自畫像。

偶 成

木 戸 孝 允

一穗寒燈照眼明。沈思默坐無限情。回頭知己人已遠。

〔木戸孝允〕山  
口藩士松菊と  
號す維新三傑  
の一人中興の  
偉業に功あり  
明治十年西南  
の役車駕に京  
都に陪す同年  
五月病歿す年  
四十四



丈夫畢竟豈計名。世難多年萬骨枯。廟堂風色幾變更。  
 年如流水去不返。人似草木爭春榮。邦家前路不容易。  
 三千餘萬奈蒼生。山堂夜半夢難結。千岳萬峰風雨聲。

\* 的に是れ先生の告白。

下通州偶成

大久保利通

奉勅單航向北京。黑烟堆裏蹴浪行。  
 和成忽下通州水。閑臥蓬窓夢自平。

\* 發強剛毅の漢亦た此の襟度あり。

松下村塾

伊藤博文

道德文章叙彝倫。精忠大節感明神。  
 如今廊廟棟梁器。多是松門受教人。

\* 偉人感化の效眞に偉大。

『大久保利通』  
 鹿兒島藩士甲  
 東と號す維新  
 三傑の一人實  
 行的力量ある  
 偉大の政治家  
 明治十一年五  
 月紀尾井坂に  
 刺客の爲めに  
 殺さる年四十  
 九

『伊藤博文』前  
 掲

新年作

日出扶桑東海隈。長風忽拂岳雲來。  
 凌霄一萬三千尺。八朶芙蓉當面開。  
 \* 何等の快活。

奉勅將發滿洲示兩師團長

山縣有朋

馬革裹屍元所期。出師未半豈容歸。  
 如何天子召還急。臨別陣頭淚滿衣。

\* 赤誠溢れて、此の二十有八字となる。

三月次某氏韵時奉天攻撃正酣。

對峙兩軍今若何。戰聲恰似迅雷過。  
 奉天城外三更雪。百萬精兵渡大河。

\* 雄渾

『山縣有朋』山  
 口藩士伊藤博  
 文と名を齊う  
 する明治の大  
 政治家兵制制  
 定に最も功あ  
 り大正十一年  
 二月歿す年八  
 十五



中庸

勇力男兒斃勇力。文明才子醉文明。  
勸君須擇中庸去。天下萬機歸一誠。

『元田永孚』肥後藩士東野と號す醇儒なり明治天皇並に昭憲皇太后に侍講して聖徳を補全す明治廿三年一月歿す年七十四

\* 萬機一誠眞に是れ至言。

望富岳

一點塵埃洗盡閑。芙蓉玉立碧霄間。  
天鍾神秀標吾土。五大洲無此好山。

\* 此の高山なきにあらず、此の好山なきのみ。

逸題

峻嶒富岳聳千秋。赫灼朝暉照八洲。  
休說區區風物美。地靈人傑是神州。

\* 此の一首を掲て、本篇の結尾と爲す。蓋し意無きにあらず。

乃木希典

元田永孚

大正十四年一月十九日 於山王艸堂梅花發處抄了

蘇峰學人

涵情養氣集終



宜將萬端事  
都入一聲歌  
靜中真氣味  
所得不勝多

大正十四年二月十一日初版發行  
昭和八年十月一日增補印刷  
昭和八年十月五日增補發行

增補國民小調

定價金七拾錢



著者 德富猪一郎  
發行兼印刷者 三樹退三  
東京市神田區錦町一丁目十番地

發行所 東京市神田區錦町一丁目十番地 民友社

發賣所 東京市神田區錦町一丁目十番地 株式會社 明治書院

電話神田(55)二一四七番  
廣告東京四九九一番

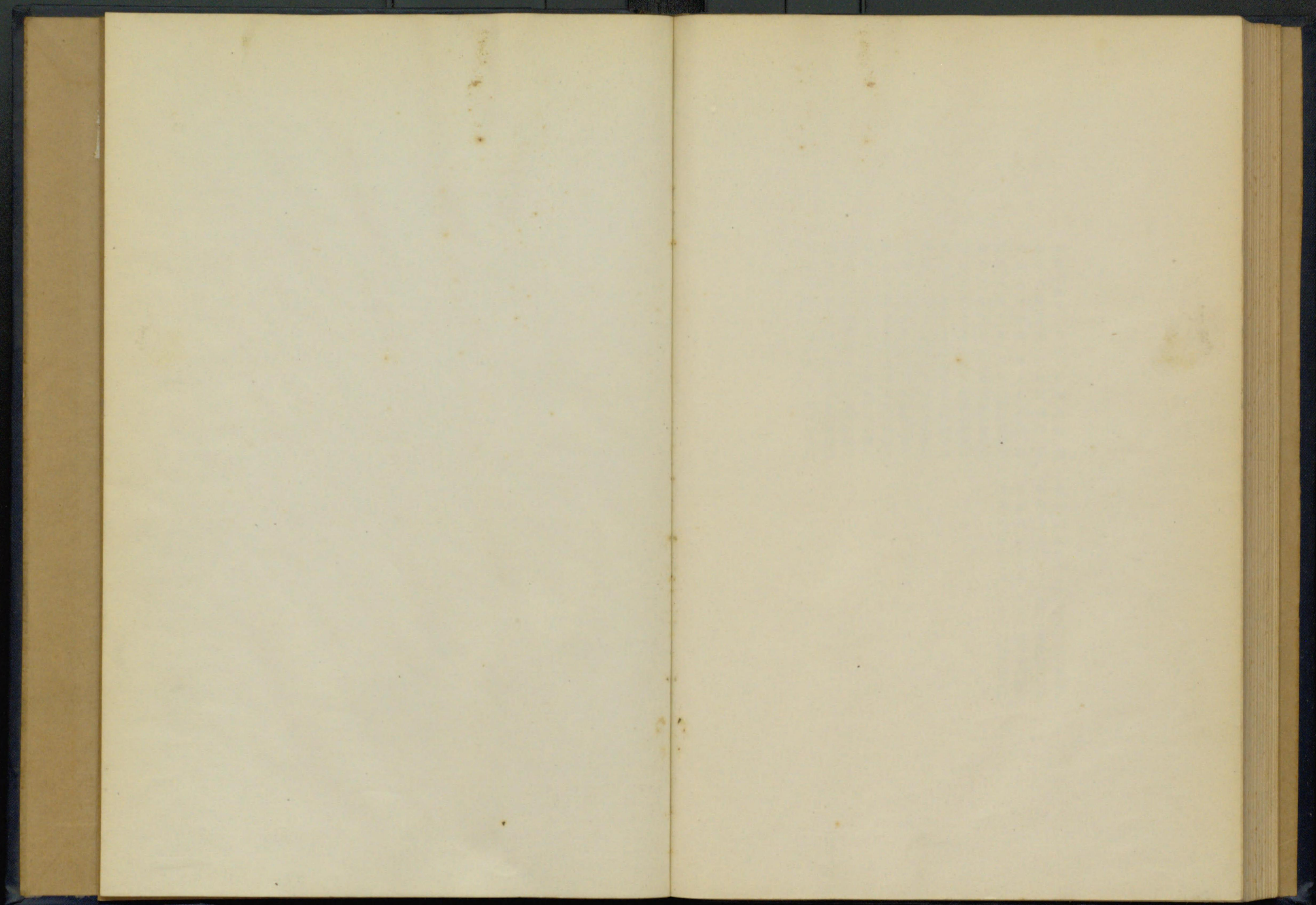
刷印所刷印章明・田神京東



大正十四年二月十一日初版發行  
昭和八年十月一日增補印刷  
昭和八年十月五日增補發行  
昭和八年十月十日二版印刷發行  
昭和八年十月十二日三版印刷發行  
昭和八年十月十五日四版印刷發行  
昭和八年十月十七日五版印刷發行  
昭和八年十月十九日六版印刷發行  
昭和八年十月二十一日七版印刷發行  
昭和八年十月二十五日八版印刷發行  
昭和八年十月二十七日九版印刷發行  
昭和八年十月三十日十版印刷發行  
昭和八年十一月十一日十一版印刷發行  
昭和八年十一月三日十二版印刷發行

昭和八年十一月十五日十三版印刷發行  
昭和八年十一月二十五日十四版印刷發行  
昭和八年十二月三日十五版印刷發行  
昭和八年十二月十日十六版印刷發行











510  
1130



